

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語試験 日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

成
績

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語試験 (日 本 語)

1. 次の文章を読み、後の問に答えよ。

この世界には、じつにいろいろな動物が生きている。われわれ人間はその「世界」の一部としての動物たちと、いろいろなかわりをもちつつ、それらの動物についてそれなりのイメージをもっている。

たとえば、狐^{きつね}について、われわれはその形態や習性などについてある程度のことを知っていると同時に、狐は化けるとか化かすとか、あるいは、ずる賢いなどというイメージをもっている。狐のほうからすれば、まさに人間の勝手としか言いようのないことだろうし、今どき狐が本当に人を化かすことなど信じている人も少ないだろうが、(ア) ざりとて、そのようなイメージはなかなか消しがたいのである。

われわれがここに取りあげる猫についても、同様のことが言えそうである。猫はきわめて身近な家畜として、われわれはその実態をよく知っている一方で、猫に関するイメージとしては、どこか現実離れをしたものを多く抱いているのである。それは、われわれの「世界」を構成する要素として重要な役割を担っている。つまり、人間のもつ猫のイメージは、その世界観をどこかで反映するものとなっているのである。この世界が思いの他に重層性をもつように、猫も①重層的なイメージをもって人間の「世界」のなかに存在しているのである。

猫は人間にとってまったく珍しくない動物である。エジプト時代より家畜として飼われていたようであるし、現在においても、猫を見たことのない人というのは、きわめて稀であろう。(最近の子どものなかには、馬を見たことがない、というのがだぶいるとのことだが。) よほどのことがないかぎり、猫を恐ろしいと言う人もないだろうし、われわれは猫の習性についても相当に知っているつもりである。しかし、そのことは必ずしも「猫を知っている」ことを意味するとはかぎらないようである。

次に、ある現代人の見た猫に関する夢を示すことにしよう。これは、アメリカにおけるユング派の分析家ホイトモントが報告したものである。夢を見た人は既婚の女性で、彼女は幻聴で自分のひとり息子ナイフで刺し殺せ、と命令する「声」を聞き、恐ろしさ(イ)のあまり分析治療を受けにきたのである。

彼女の夢は次のようであった。彼女は美術館のなかにいた。そこにあつた石像の猫が生命を吹きかえし、彼女が何を探しているかたずねた。彼女は古代の秘密を知りたいのだと答える。猫は彼女を地下室へと導き、そこで彼女は、たいまつをもった古代の人々に会う。彼らは彼女が彼らの仲間に入りたいのかとたずね、彼女は、はいと答える。そこで、彼女はそれに続くイニシエーションの儀式に自分を捧げることを誓う。

ホイトモントは、この婦人がこの夢を見た時に感じた、深いおそれの感情を重視している。石像の猫に導かれて、地下の世界で行われるイニシエーションに参加しようとするとき、彼女はそれがどのようなものであるかを知らない。彼女は何も知らないままに、おそれおののきつつ、それを信じようとする。このことこそ、②われわれ現代人にもつとも不足していることではないか、とホイトモントは指摘するのである。

日常の世界において、猫がもちろん話をするはずはないし、石像が生命をもつこともない。おそらく、われわれは生きているうちに、そのようなことを体験することはなかろう。猫はものを言わないし、石像は自ら動きはしない。それは確かなことである。

しかし、(ウ) いっただいそのように確信している自分は、自分という存在はどれほど確かなものであろうか。われわれは自分自身について、どれほどのことを知っているのか。(エ) そもそも、われわれは、自分がどこから来てどこへ行くのかを知らないのである。このような③不確かさの次元において世界を見ると、今まで確実で明白だと思っていたことが、そうでないことを思い知らされるのである。

美術館に陳列されていた猫は、エジプトの神バスト(Bast)の像でもあつたのだろうか。エジプトの神バストは、猫の体や頭をもった、月の神である。おそらく、この夢を見た女性の心のなかで、長らく「石化」されたままであつた部分が、生命を吹きかえし、彼女を心のより深い層へと導くことを成したのであろう。

われわれ現代人は、この世のすべての現象を知りつくしているかのように錯覚し、何かをおそれることなどがきわめて少なくなっている。そのときに、彼女はまったく思いもかけなかつた「息子殺し」の可能性について知らされ、続いて石化した猫が自ら動き、問いかけてくることを経験したのである。彼女がおそれおののいたのも当然であるし、そのことこそがわれわれ現代人にとって必要なことではなかろうか。

(河合隼雄『日本人とアイデンティティ―心理療法家の着想―』(講談社+α文庫)による。294～297頁)

問一 傍線部 (ア) ～ (エ) について、次の表現を用いて文脈が分かるようにそれぞれ二文以上で作文せよ。

- (ア) 「ざりごと」
- (イ) 「のちまり」
- (ウ) 「いっさい」
- (エ) 「そむそむ」

問二 傍線部①「重層的なイメージ」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

問三 傍線部②「われわれ現代人にもっとも不足していること」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

問四 傍線部③「不確かさの次元において世界を見ると、今まで確実で明白と思っていたことも、そうでないことを思い知らされる」とはどのようなことか、本文中の事例にふれながら説明せよ。

二、問一～二に答えよ。

問一 次の文中の空欄(①)～(⑩)に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の()内に直接記入せよ。

私達は一瞬(①)話し手の含意を理解できるのですが、時々、話し手の本心がわからないことがあります。

シカゴであつた学会(②)当時3歳の娘と一緒に出かけた時のことです。発表を終えて、遊園地で息抜きをしていたとき、そこでシカゴ在住の日本人家族に出会いました。

姉妹がキッズルームで遊んでいる様子(③)、娘はじつと黙って見ていました。娘と一緒に遊びたいのは確かだったので、初めての外国です。姉妹は7歳(④)5歳で、娘よりお姉さんでしたし、「(仲間に)いれて」と言えず(⑤)いました。

7歳のお姉さんが「一緒に遊ぶ?」と何度か言つた後に、娘が「リニックスにお菓子がいっぱい入つてゐる」と普段より少し大きい緊張した声で言いました。お姉さんは「?」と首(⑥)傾げて、向こうへ行つてしまいました。みなさんは娘の意図がわかるでしょうか?

実は娘は小さなリニックスにいつもお菓子を入れていて、散歩の途中で時々休んでお菓子を食べるのです。つまり娘は「リニックスに入つてゐるお菓子を一緒に食べよう(＝一緒に遊ぼう)」と勇気を奮つて言つた(⑦)です。でも、残念ながら彼女の勇気はうまく伝わりませんでした。

もうちよつとはつきり意思表示すれば良いのにと、日本人でもアメリカで育つ(⑧)、言葉で表現しなければ伝わらないアメリカの文化(⑨)身につくのかとか、色々考えさせられる出来事でしたが、子ども(⑩)限らず、人と人のコミュニケーションでは、「そんなつもりじゃなかったのに」ということが時々起こります。

(時本真吾『あいまいな会話はなぜ成立するのか』《岩波科学ライブラリー 295》による。8～9頁)

問二 次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

私たちが社会で生活するときに、毎日一番よく見ているのは顔です。私たちにとって、顔があるということはあたりまえなのです。もしかしたら、毎日の生活で自分には顔があるということを特に（①）） かもしれません。しかし、そのあたりまえの顔が人間にとってどういう意味をもっているのでしょうか。それは一言ではなかなか（②））。人間にとって、顔は実にいろいろな意味をもっているのです。

まず、当然ながら忘れてはならないことは、人間が生きていくためには顔が必要だということです。人間はもともと動物ですから、動物としての顔があります。ほとんどの動物には顔がありますが、これについてときどき質問を受けることがあります。もし宇宙のどこかに知的生物がいて、それが地球に（③）） となしたら、その生物はわれわれと同じような顔をしているのだろうか、まったく（④）） 顔なのだろうか、と。それに（⑤）） ためには、いま私たちがもっている顔がどのようにしてできたのか、どういう必然性があつてできたのか、ということに触れないわけには（⑥））。

結論からいうと、人類学、動物学の専門の人はこのように（⑦））。もし、その知的生物がやはり水の中で生まれ、そして海中から陸上へというように、地球と同じような環境のもとで（⑧）） ならば、人間とほとんど同じ顔をしているだろう。つまり、目が二つ、鼻が一つ、その下に口が一つというような格好は（⑨）） のではないかというわけです。

しかし、顔についている目、鼻、口という器官は同時に（⑩）） わけではありません。当然ながら順番があります。

（原島博『顔学への招待』〈岩波科学ライブラリー62〉による。8～9頁）

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

幸福な世界は不幸な世界とは別ものである。——『論理哲学論考』の終わり近くで、ワイトゲンシュタインはそう述べている。

例えば、熱烈な恋愛のさなかにいる人や倒産の危機のような問題を抱え込んでいる人は、そうではない人とたとえ同じものごとを見ていたとしても、かなり違った仕方で見ているに違いない。恋愛中の人は何かおいしいものを食べたときにも恋人と一緒に食べたいと思うだろう。あるいは、その場にその恋人がいないという痛切な不在の思いを抱くかもしれない（他の人たちはそんな思いを抱きはしない）。倒産の危機にいる人は、何か救済の力になるような「藁」の一本も落ちていやしないかとたえず目を凝らしているかもしれない。その人たちにとっては、世界そのものが異なつた相貌で現われてきているのである。

もっと平凡な日常を送っている場合であっても、多かれ少なかれ、世界は人ごとに異なる相貌で現われている。誰もがそれぞれの物語を生きており、その物語に応じて、この世界は異なる関心のもとに捉えられ、異なる価値・異なる意味を与えられる。では、他の物語を生きている他者を、私はどのように理解できるのだろうか。

私は私の物語を生きてきた。あなたはあなたの物語を生きてきた。そんな二人が出会い、しばらく行動をともにする。そのとき、私の物語とあなたの物語はそこで同じ場面を共有し、同じ筋書きを共有する。そうして多くのものを共有すればするほど、お互いの理解は深まるだろう。

だが、二つの決定的な点において、私の物語とあなたの物語は共有されないものを残している。第一に、私の物語では私が主人公であり、あなたは脇役にすぎない。私は私の関心のもとに世界を捉え、私にとっての価値・私にとっての意味をものごとに与える。逆に、あなたの物語ではあなたが主人公で、私は脇役にすぎない。

第二に、そこで共有されているのはその場面だけでしかない。その場面に至るまで、二人は異なる物語を生きてきた。同じ場面であっても、異なる物語の中に置かれたならばそれは異なる意味をもつたものとなる。

同じ場面を共有し、同じ筋書きを共有しているとしても、私があなたを理解するには、それだけではまったく不十分である。私の物語の中であなたは脇役にしかない。だから私は私の物語を出て、あなたが主人公の物語の中に入っていかなければならない。

世界には、主人公が異なる複数の異なる物語が同時進行している。この状況を、私は「ポリフォニー（多声音楽）」という言葉で表現したい。これはまだ、ミハイル・バフチンがその古典的なドストエフスキ論においてキーワードにしたものでもある。「それぞれに独立して互いに融け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキの小説の本質的な特徴なのである。」（『ドストエフスキの詩学』）だが、別にドストエフスキを引き合いに出すまでもない。私たちのこの世界がまさにポリフォニー的なのだ。

とはいえ、このポリフォニーの世界を捉えるのは容易なことではない。ドストエフスキーのような才能がないから？ いやそれ以上に、私は物語の中にいるからである。ドストエフスキーは作者として物語の外にいる。それに対して私は、私自身主人公として一つの物語を生きている。その物語の内側から、無数の主人公をもつこのポリフォニーをポリフォニーのままに聞きとらねばならない。それは難しいことである。しかし、不可能ではない。

実際、小説を読むとき、私たちはその登場人物を主人公とした物語の世界に入っていくだろう。私たちにはそのような想像力が備わっている。そしてなによりも私たちは、この幾重もの旋律が生み出す調和を聞き分ける感受性を磨くことができる。

(野矢茂樹『哲字な日々 考えさせない時代に抗して』〈講談社〉による。 212 ～ 215 頁)

[illegible]